

# 延慶本『平家物語』の女人往生

—善知識の視点から—

横山知恵

はじめに

『平家物語』に描かれる女性たちは、身分や環境の違いを通して様々に描かれてきた。彼女たちの最期は、出家して余生を送る場合と入水を選び果てた場合のただ白い二通りに描き分けられているが、祇王・仏といった白拍子から、大納言佐(平重衡の妻)・建礼門院など国母・貴人まで、出家して余生を送った人々は身分の差なく物語に取り上げられ、その中には往生を遂げたと記される人々さえいる。

先行研究では、祇王と仏の物語から女人の往生を捉えた考察や大原御幸の場面から建礼門院の往生が物語の主題にどう関わってきたのかを論じたものが主流を占め、物語全体から大きく女人往生を捉えたものは覚一本を中心に考察した服部幸造氏の論以降、ほとんど見られない。服部氏は、往生を遂げたと記される女性達の中から特に千手前に着目し、平重衡の菩提を弔い、自身も往生の素

懐を遂げたことから、千手前の物語内での役割が、平家一門に対する建礼門院の役割と同じであったことを指摘する。そして、物語全体を通して女人往生が説かれているのは、亡き人の菩提を弔う人と建礼門院没後の仏事を営む人々に限定されていることから、壇ノ浦の合戦後の後日譚である灌頂巻から建礼門院の往生を特立強調することが覚一本の構想であったと考察している。<sup>(注1)</sup> この服部氏の指摘を踏まえ、本稿では灌頂巻を特立しない諸本の一つ、延慶本を中心に考察を試みることにする。

## 一、『平家物語』の女人往生

まず、『平家物語』諸本を通して女人往生の例を見てみよう。語り本系諸本では、建礼門院・大納言佐・阿波内侍・千手前・祇王・仏・祇女・とちの八人が往生を遂げたとされ、成親の北の方や横笛のように平家一門に関わりがなく出家した女性が往生を遂げたという記述は見

られず、往生の主体を限定している。それに対し、読み本系諸本では、建礼門院・祇王らの他、小督(延慶本のみ)や鳥羽刑部左衛門女房母(延慶本・長門本・源平盛衰記)、巴(源平盛衰記のみ)の往生も記される。特に延慶本では、建礼門院・義王・義女・閉・仏・小督・鳥羽刑部左衛門女房母の七人が往生したとされ、さまざまな階層に属する女性たちの物語が展開される。

これらの物語は、義王と小督が清盛の横暴を語る物語として、鳥羽刑部左衛門女房母は文学発心譚の物語として、そして建礼門院は清盛をはじめ平家一門の鎮魂のために残った女性の物語としてそれぞれ位置づけることができるが、七人は自らの身に起こった悲劇を逆縁として受け止め、出家・往生へと向かう契機としたことが共通している。

このうち小督と建礼門院の二人には、いくつかの共通点がある。まず高倉天皇の皇子を生むこと、つまり皇統につながる問題と関わっており、清盛の権力獲得をめざす物語の展開と深くつながっていることである。そして大原の地で生活をしたこと、臨終時に「臨終正念」して往生を遂げたことと記されていることも挙げられよう。

「臨終正念」の語について、延慶本では、重盛・惟盛・後白河法皇・小督・建礼門院の五人に使われるが、男性

は重盛(第二本・廿六)と後白河院(第六末・廿五)の例を除きすべて伝聞の形で書かれており、臨終時に「臨終正念」したと記されるのは女性のみである。一方、語り本系諸本では、覚一本・屋代本・百二十句本ともに、重盛・俊寛・建礼門院(屋代本・百二十句本)の三人に見られるが、臨終時に「臨終正念」したと記されるのは重盛のみで、女性の臨終には使われない。他に女性が往生を遂げる際に「臨終正念」したと記されている諸本としては、南都本・四部合戦状本(以下、四部本)があるが、『平家物語』以前の軍記物語には見られず、真名本『曽我物語』で大磯の虎の母の往生に「臨終正念」という語が使われる以外、例は確認できない。<sup>注10)</sup>

往生伝や説話集でも検討したところ、女性の往生にはわずかの例しか確認できず、主に男性に使われていること、男女ともに「臨終正念」という語を用いずに往生を遂げている例もあることから、彼らが往生を遂げるためには、念仏を唱え続けること、妄念を消し去ることであった、あえて「臨終正念」の語を用いる必要はないことがわかる。

「臨終正念」の語を用いずとも往生を遂げた人々が記されているのに、延慶本で特定の人物にあえて使用しているのはなぜであろうか。この語を付与された小督と建

礼門院の二人には他に共通するものがあると考えられる。例えば臨終時まで妄念が強く残っていたと仮定し、二人が出家し妄念を克服するまでの過程から物語をたどれば、物語全体にわたって記される女人救済の物語を再考察する手がかりが得られるのではないだろうか。

そこで本論では特に小督と建礼門院の物語から、出家の動機と臨終の場面を中心に取り上げる。先ほどの仮定を基に、彼女たちを往生へと導くために必要な存在である「善知識」に注目し、その存在が物語の女人救済にどう関わってくるのかを考えてみたい。

## 二、『平家物語』の善知識

中村元氏監修の『広説佛敎語大辞典』によると、善知識という語には六つのとらえ方がある。往生伝や説話集、物語などでは、特に「教えを説いて、仏道に入らしめる人。仏道への手引きをする有徳者。立派な指導者。教え導く人。正しい道に導く人。人に生まれてきたことの真の意味を教えてくれる人。賢者。」が一般的な解釈として理解されているようである。<sup>(注)</sup>

善知識の存在を考えるにあたって、『平家物語』諸本における用例を確認すると、多くは出家の際に戒師を務めた僧侶や、臨終時に付き添い往生へと導く役割を持つ

た上人・聖に対して使われており、また人の死(女性や幼い子を含む)を目の当たりにしたことがきっかけで発心する例も枚挙に暇がない。延慶本における「善知識」の用例を確認すると、十三例の用例のうち、先述したような人の死を「善知識」ととらえているのは六例(第二末・二、第三本・五、第五本・廿五、第五本・三十、第六本・廿七、第六末・廿五)、臨終に付き添い往生へと導く例は二例(第二本・十八、第五末・十九)であるのに対し、出家の戒師を「善知識」と呼ぶのはわずかに二例(第三本・卅一、第六末・廿三)であった。その他一例(第五本・三十)は恋の失望からであり、残りの二例は後ほど建礼門院を取り上げる際に詳述する。他の諸本にも異なる用例はいくつか見受けられる。例えば、屋代本・平家抜書には、以下のような義王の言葉がある。

「本ヨリ和御前ノ恨ニ非ズ。憂世ノ中ノサガナレバ、身ノ程ヲコソ思ベキニ、トモスレバ和御前ノ事ノミ恨メシクテ、往生セン事モ叶ベシトモ覚ヘズ。現世モ後世モ愁ニシソシタル心チシテ有ツルニ、加様ニ様ヲ替テヲハシタレバ、日来ノ科ハ露塵計モ残ラズ。今ハ往生疑無シ。此度素懷ヲ遂ン事コソ、何ヨリモ嬉シケレ。吾等ガ尼ニ成シヲコソ、世ニ有リ難キ事ノ様ニ、人モ我身モ思ヒシカ。サレ共其ハ世ヲ

恨ミ身ヲ恨テ成シカバ、様ヲ替ルモ理ナリ。只今和御前ノ出家ニ比ブレバ、事ノ数ニモ有ラズゾトヨ。

其故ハ、和御前ハ歎モ無シ、今年纔二十七ニこそ成給へ。穢土ヲ厭ヒ浄土ヲ願フベシト、深く思入レ給フこそ、誠ノ道心トハ覚ヘタレ。嬉シカリツル善知識哉。イザ諸共ニ願ハン

(平家抜書「義王義女仏閉事 同出家事」)

義王は出家したものの、仏への恨みが妄念となって往生を妨げていた。しかし仏の告白を聞き、自ら髪を切つて尼となった仏の存在が妄念を消し去る「善知識」となつたと話している。延慶本の義王は仏を「善知識」と明記してはいないが、「善知識」の存在が妄念を克服させたとする物語の展開は一致する。

延慶本における女人往生を考へる上で、「善知識」の存在は単なる仏道上の導き手という枠で捉えられないように思われる。それを解明するのに参考になるのが、『宝物集』の用例である。今井ちとせ氏によると、諸本間の構成上の違いはあるが、「正統的な仏典や仏教書では為されていない」、「憂きことにあふも善知識」というとらえ方があるという。

諸経の中に、「あるいはまづしく、あるひは世をうらみ、或はうき事にあふ、みな善智識の因縁なり」

とぞ申ためる。(吉川本)

又、父妻親子ニヲクレ、ウキコトニ値ヒ、ハチヲ見ルモ、横難ニカ、リテ、法師尼ニナルモ善知識ト思ベキ也。(片仮名三卷本)

この「諸経」が具体的にどのような経文を指しているのかは不明であるが、今井氏はこの「とぞ申ためる」という断定を避けた結び方から、作者自身が経験的に受け止めていた諸経の示す所を叙述した可能性があると指摘する。また、『宝物集』から四部本『平家物語』への影響を考へる上で、語句の引用や故事の利用にとどまらず、登場人物の思考法にも「憂きことにあふも善知識」というとらえ方が見出せることを示唆している。

今井氏の指摘は、建礼門院の往生場面で四部本とほぼ同文関係にある延慶本にも、適応できると思われる。以下、物語の展開を追っていく上で参考にしたい。

### 三、小督の出家と往生

では、実際に小督の物語から検討してみよう。延慶本では、高倉院の治世を偲ぶ追悼説話群を列挙する巻六(第三本)に配置されるが、義王の物語と同様、平清盛の横暴を語る説話として見ることが出来る。

小督は、桜町中納言成範の娘、少納言入道藤原通憲

(信西入道)の孫で、『平家物語』では高倉院との悲恋で有名な女性である。「内侍督ノ方ニ奉公」する「品イシカラヌ女房」(「イシカラヌ」は底本のまま。「イヤシカラヌ」の意でとるか)で、「見ル人、思ヒヲ懸ケ、聞ク人、心ヲ悩マサズト云フ事ナシ」とまで形容された美女であった。小督を寵愛し娘の中宮を「スサメマヒラセ」(遠ざけ)る高倉天皇に激怒した平清盛は、小督を捕らえて尼にしようと考えてる。身の危険を感じた小督は宮中から失踪し、身を隠してしまう。小督を失った天皇は、藏人仲国を探索へ向かわせる。

小督は突然訪ねてきた「内裏ヨリノ御使」を怪しみ、「ヨモ内カラノ御使ニハアラジ。平家ノ知リテ人ヲ遣ハシタルゴサムメレ」と、仲国を清盛入道相国が遣わした平家の侍と断定し、頑なに面会を拒む。延慶本以外のすべての諸本ではまったく物音も話し声もしていないのに対し、延慶本のみ小督の心情が語られる。小督は清盛に対する恐れから警戒心を露にし、仲国を必死で追い返そうとするが、締め出されると思った仲国に逆に押し入られてしまう。仲国に帝への返事を促され、孤独な小督は失踪した理由を次のように語る。

「始ヨリ申タカリツレドモ、世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサニ、カクトモ申サ、リツレドモ、強

二恨給ヘバ、去リ難クテ加様ニ申ス也。世ニ隠ナキ事ナレバ、定テソレニモ聞給ケム。入道ノ方ザマニ、安カラヌ事ニシテ、召出テ失ハルベシナムド聞ヘシカバ、心憂ク悲テ、ゲニモサ様ノ事アラバ、生ナガラ恥ヲ見ムモウタテクテ、君ニモシラレマヒラセズ、人独リニモ知ラレスシテ、内裏ヲ迷出候シ時ハ、『イカナラム淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ知ラレム』トコソ思シカドモ、人ニ申合セシカバ、『淵川ニ入テ死ヌル者ハ、吾身ヲ害スル咎ニヨリ、悪道ニ落ル』ナムド申シ、事ノ怖サニ、今マデ思煩テ、水ノ底ニモ沈マズ、ツレナクカクテ候ヘバ、定テ君ハ、『隆房ニ心ヲ通シテ、隠サレタル歎』ナドモヤ思召候ラムト、ハツカシクコソ候ツレ。但、是ニカクテ有ラム事モ、只宵計也。明ナバ大原ノ奥ニ尋入り、今ハ思立ツ事ノ有ツレバ、日来ハ筆ニ手懸ル事モナカリツレドモ、『宵計ノ名残也。夜モフケヌレバ、誰カハ聞モトガムベキ』ト、憚ル心モ無クシテ、筆ヲ弾ツル程ニ、聞出サレニケリ」

(第三本 五「小督局内裏へ召ルル事」)

ここで注目すべきなのは、小督自身の語る言葉に入水の断念、「恥」の意識が見られることである。傍線部のように小督は、宮中を出奔し隠れ住む自身の「身程ノハツ

カシサ、清盛に発見され殺害されるかもしれないと危惧し「生ナガラ恥ヲ見ムモウタテクテ」、そして寵愛される前の恋人であった「隆房」に隠し置かれたと天皇に誤解されていると推測し、そう思われる我が身を「ハツカシクコソ候ツレ。」と語る。二度も恥の意識を口にし、失踪が本意ではなかったことを強調する。

さらに『イカナラム淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ知ラレム』と入水を考えるが、波線部のように『淵川ニ入テ死ヌル者ハ、吾身ヲ害スル咎ニヨリ、悪道ニ落ル』と言われて断念したことまで明かしている。小督は世間の人に自分が死んだと思わせることで、人々の噂が清盛の耳に入るようにしようとした。つまり「此世ニナキ者ト人ニ知ラレム」の「人」は清盛を指しているのである。では、「人ニ申合セシカバ」の「人」は誰を指すのであろうか。明記されていないが、「悪道ニ落ル」と自殺をやめるよう諭すことができ、身近で相談することのできる立場の者であらう。

この小督の入水の断念は他の平家諸本では一切触れられず、その断念の理由が「悪道ニ落ル」であったことは、注目すべきである。この表現は、延慶本全体では義王のみに見られるものであるが、「淵川ニ入テ死ヌル者ハ、吾身ヲ害スル咎ニヨリ」という表現についても、やはり

先行する軍記物語の中には確認できず、真名本『曾我物語』で若くして夫と死に別れた曾我兄弟の母に類似する表現が見られる程度である。この表現から読み取れるのは、自死を選ぶ女性は悪道に墮ちるということである。だが、以下の箇所を読むと、小督は自死とは別の理由で入水をあきらめざるを得なかったことがわかる。

カクテ何程ナカリケルニ、顕レニケル事ハ、小督局内裏ヲ出給ハザリケル其サキヨリ、只ナラズナリ給テ、四月計ニナリ給ヘル時、カ、ル事ハ出来ニケリ。召帰サレテ後、御産モ近く成ケレバ、力及給ワズ里へ出給ニケリ。

（第二本 五「小督局内裏へ召ルル事」）

傍線部を見てもわかるように、小督は内裏を失踪する前に懐妊し、失踪当時は四ヶ月の身重であったと記されている。身重のまま死ぬのは特に罪深く「悪道に落ちる」と考えたため入水を断念したが、懐妊したまま出家すれば出産の時に憚りがあるため、すぐには出家できない状態であったのである。

入水と「恥」の関係については、義王、小宰相が入水を決意する場面でも共通する表現が見られる。順に該当箇所を挙げてみよう。

仏の推参により邸を追い出された義王は、帰宅すると母

に以下のよう語る。

「哀レ、我イカナル方ヘモミヤダテ、イカナル人ノ子トモナシ給ハデ、加様ナ遊者トナシ置キ給テ、今ハカ、ルウキ目ヲミセ給事ヨ。サモアラン人ヲ取居ヘテ、我ヲ思捨給ハムハ力オヨバズ。同サマナル遊者ニ思替ラレヌル事ノ口惜サヨ。カ、ル身ノ有様ニテ、長ラフベキ契ニハアラネドモ、一旦ナレドモナノメナラズ不便ニシ給ツレバ、近モ遠モウラヤミテ、目出カリツル事哉トテ、祝ノタメシニモヒカレツル事ノ、イツシカカクノミナレバ、『サレバコソ。ホドナラヌ者ノ成ヌルハテヨ』ト云ハレムモハツカシ。夢幻ノ世ナレバ、トテモカクテモ有ナム。義女御前ガ候ヘバ、母ハソレヲタノミテ、ウキ世ノ中ヲ渡リ給ヘ。ワラハニハ只身ノ暇ヲタベ。イツクノ淵河ニモ沈ミナム」

(第一本 七「義王義女之事」)

義王は、「サモアラン人」ではなく「同サマナル遊者」である仏に負けた悔しさをにじませながら、「『サレバコソ。ホドナラヌ者ノ成ヌルハテヨ』ト、云ハレムモハツカシ。」と嘆く。女として清盛の寵愛を失ったことを世間の人々に噂されることが「ハツカシ」く屈辱的であるため、入水を決意するのである。

また小宰相は、通盛戦死の知らせを受けた際に乳母子の女房に以下のように語っている。

誠ヤラム、女ハ身々トナル時、十二九ハ死ルナレバ、カクテ恥ガマシキ目ヲ見テ、トモカクナラム事モ口惜シ。若シ此世ヲ忍過テナガラヘテモ有ハ、心ニ任セヌ世ノ習ナレバ、不思議(正)ニテ思ワヌ外ノ事モ有ルゾカシ。心ナラズサル事モ有バ、草ノ影ニテ見ム事モハツカシケレバ、此ノ世ニナガラヘテモナニカハセム。マドロメバ夢ニミヘ、サムレバ面影ニタツゾトヨ。

(第五本 三十「通盛北方二合初ル事 付通盛北方ノ身投給事」)

小宰相は「身々トナル」身(懐妊中)である。「妾ニテオワシケレバ一舟ニハ住ミ給ワズ」という存在であり、世間の人々に遠慮する不遇な立場でもあった。夫に先立たれた妻が一人で生きていくことは難しく、ましてや形見の子どもがいれば、養育するためにやむをえず再婚する可能性もあった。しかし通盛一人を頼みにしていた小宰相は、「心ニ任セヌ世ノ習」に従うことは「草ノ影ニテ見ム」亡き夫への裏切りであると考え、「ハツカシ」さのために入水を敢行してしまう。(正)

このように、義王が入水を決意したのは、清盛の寵愛

を失った絶望と芸能者であることの意地からであり、小宰相の場合も世の習いである再婚を厭い夫への貞節を守るためであった。それに対して小督の場合は、清盛の迫害を逃れるため、また天皇への貞節を守るためであり、自分ひとりの意思ではなく帝を思いやつての行動であったことが読み取れる。

その後宮中に連れ戻された小督は、人目につかないように隠され、再び帝の寵愛を受けるようになるが、出産後宮中に戻ったところを、清盛に見つけられてしまう。そして清盛自身の手で無理やり髪を切られ、尼にされて追放されるのである。

小督局心ナラズ尼ニナサレテ、口惜トモ云計ナシ。  
「哀レ、嵯峨ニテ思立タリシ時、大原ノ奥ヘモ尋入りテ、吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニク、テ有ルベキニ、由無クモ再ビ召婦サレテ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」ト歎給ヘドモ、甲斐モナシ。「ヲシカラヌ命ナレバ、水ノ底ニモ入りナム」ト思立給ヘドモ、サキニモ人ノ云シ様ニ、悪道ニ墮ム事、心憂ク覚ユレバ、「今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ。後生ハ終ノ栖ナレバ、浄土ヲコソ願ハメ」トテ、終ニ大原ノ奥ニ分入りテ、柴ノ庵ヲ結び、一向念仏シ給ケリ。露モ怠ル事ナク明カシ暮シ給シガ、齡八十二テ、日來

ノ念仏ノ功積リ、臨終正念ニテ往生ノ素懐ヲ遂ゲ給フ。

（第三本 五「小督局内裏へ召ルル事」）

小督は清盛に無理やり尼にされたことを「恥ヲ見ツル悲シサヨ」と悲しみ、またも「恥」の意識を持ち出している。嵯峨野にいてそのまま出家していれば、「恥」をかかされることもなかったのという悔しさと、宮中に帰ってしまったことでのような運命に陥ってしまったという後悔。清盛による尼削ぎで受けたたとえようもない屈辱・無念さは、清盛への「恨み」として小督の心に残ったはずである。しかし気丈な小督は、波線部にあるように清盛への「恨み」を逆縁と捉え出家の契機とした。来世で浄土へ往生することを願い、ついに大原の奥での勤行生活を選んでいくのである。

小督が自分の意志ではなく清盛によって尼にされたことは、すべての諸本に共通して書かれているが、多くの諸本が小督の最期について書いていないのに対し、延慶本では、清盛への恨みが消え、「臨終正念」して往生を遂げたとされている。先述した『宝物集』のとらえ方に即して考えると、清盛による尼削ぎという行為は「横難ニカ、リテ、法師ニナル」（片仮名三卷本）ことであり、小督はそれを「一旦ノ恥」と理解する。はっきりと本文



中に明記されてはいないが、道念を起こすきっかけとして清盛の悪行が「善知識」となったことは明らかであり、小督の持ち続けた妄念は念仏を唱え続けることによって最終的には克服され、来世へと往生を遂げたのだと読み取れることも可能であろう。清盛の圧迫が結果的に来世を願う小督自身の往生につながったのである。

#### 四、建礼門院の出家と往生

次に、建礼門院について考える。延慶本での建礼門院（以下、女院）は、長兄・重盛の次男・資盛が鷹狩りの帰りに撰政松殿基房の車に無礼を働いたとして乱暴を受け、その報復として清盛が後日基房の行列を襲わせ、家人の髻を切った事件の頃、后立の宣下を受ける。「ユ、シクニガリテゾ有ケル。」と評されるように、この報復から清盛をはじめ一門が後白河法皇や公家たちから冷たい目で見られるようになり、法皇側と清盛側の関係がギクシャクし始める不安な情勢の中で入内であった。

山添昌子氏は、女院は「后立ノ御定」の際に意図的に①「世ノ乱レケル根元」「平家ノ悪行ノ始メ」を作った人としての意味を持たされ、②後白河法皇、高倉天皇に不快の念を与えた人という役割を担われたとし、「アヲキ」や「小督」との関係を取り上げる際には、高倉天皇に愛

されるどころか嫌悪され、それに激怒した父清盛に励まされて彼女の方から出向くが、それがよけいに高倉を苦しめ悩まし、死に至らしめた悪妃として造型されたと考察している。<sup>(注8)</sup>

しかし壇ノ浦での一門滅亡・都への還御後は、一転して一門の救済と自身の往生を願い、後白河法皇に六道を体験したと語る。一門の代弁者として描かれる。ここでは大原御幸の場面から、建礼門院自身が出家の動機を語り、妄念の解消へと向かう描写に注目する。突然の訪問を受け法皇と対面した女院は、還御後の生活を次のように語る。

「カ、ル身ニ罷成ル事、一旦ノ歎ハ申スニ及ネドモ、  
一二ハ来生不退ノ悦アリ。其故ハ我五障三従ノ身ヲ  
受ナガラ、已ニ釈迦之遺弟ニ列リ、悲願ノ証明ヲ憑  
テ三時ニ六根ヲ懺悔シ、一筋ニ今生ノ名利ヲ思捨テ、  
九品ノ台ヲ願ヒ、一門之菩提ヲ祈ル。サレバ一念之  
窓ヲ開テ三尊ノ来迎ヲ期シ、三途ノトボソヲ閉テ出  
離之妙果ヲ願フ。是只一門別離ノ期ニ非ズヤ。サレ  
バ然ルベキ善縁善知識トコソ思侍レ。昔シ龍顏ニ  
近付奉リシ四季境節ニ付テ榮シマ、二ハ、長生  
不死ノ齡ヲ願ヒ、蓬萊不死ノ薬ヲ求テモ、久カラム  
事ヲ思ヒ、カ、ル拙キ事ヲノミ心ニ懸侍リテ、後ノ

苦ヲ知ラズ。今ハ心ニ叶ヒ侍ラバヤト思シ龍顔ニモ  
オクレ奉リ、糸惜シ悲シト思奉リシ天子ニモ別レ、  
父モナク母モナキ、ツタナキ身ニナリヌル上ハ、ナ  
ジカハ人ヲモ恨ミ、世ヲモ歎カシク思侍ベキ。

(第六末 廿五「法皇小原へ御幸成ル事」)

傍線部にあるように、女院はこのような落魄の生活になつたことや一門の入水を「一旦ノ歎」とし、「然ルベキ善縁善知識」であつたと捉えている。そして「下界二住ミナガラ、六道ヲ経歴シタル身」として、生きながら六道を経験したので、夫、子、父母と死に別れたことも嘆いてはいないと語る。本文に延慶本との類似箇所が見られる『閑居友』にも、「いみじき善知識」「これにすぎたる善知識はなし」と一門の入水を出家の契機としたことが明記されている。

それを受けて法皇は、「穢悪五障ノ女人」である女院が女性の身のままで六道を経験したことについて疑念を抱き、強いてその経験を語らせようとする。この表現には、顕密仏教における差別的な女人往生観が色濃く残っていることがうかがえる。古来女性は、生まれながらにして自分自身の内に五障の障りをもつために成仏できないとされていた。五障とは、梵天王・帝釈天・魔王・転輪王・仏になりえない五つの障りをいい、『法華経』「提

婆達多品」をはじめ、多くの経論や世間の法などでも、女性は地獄の使い、仏の種子を断つ者、亡国の根源、不信を体とする者、五障三従の者などといわれ、不成仏の者と見なされ仏の救いから排斥されてきたのである。

こうした法皇の差別的な言葉に対して女院は、「「地獄ハ地獄ニ非ズ、我心ニ地獄有リ。極楽ハ極楽ニ非ズ、我心ニ極楽有リ」ト申ス。只地獄モ極楽モ、我心ノ内ニ備ル事トコソ承リ候へ」と、源信が『万法甚深最頂仏心法要』妙莊嚴王本事品の項で述べた章句を引き、地獄であるか極楽であるかは自分の心が感じるものだと答え、乞われるままに自らの体験を六道になぞらえて語る。女院の告白を聞いて法皇は涙を流し、その涙に導かれるように、女院は続けて法皇への恨み言ともとれる言葉と安徳追憶の想いを直接ぶつける。

『共ニ底ノミクツト成ラム』ト取付奉シヲ、二位殿  
『人ノ罪ヲバ、親ノ留リ子ノ残リテ訪ワヌカギリハ、  
『苦患通レザムナル物ヲ。サレバ我身コソ今ハ空ク  
成ルトモ、残留テ、ナドカ先帝ノ御菩提ヲモ、我等  
ガ苦患ヲモ訪給ハザルベキ』トテ、引放テ出給シ  
カバ、

(第六末 廿五「法皇小原へ御幸成ル事」)

女院は自らの目で見た入水場面を語り、安徳天皇と平家

一門の最期を再現する。入水直前、後を追おうとした女院に対し、二位殿は傍線部にあるように生きて菩提を弔うことを要求する。影響關係が指摘される『閑居友』にも、「女人をばむかしよりころす事なし。かまへてのこりとゞまりて、いかなるさまにても、後の世をとぶらひ給べし。おやこのするとぶらひは、かならずかなふ事也。たれかは今上の後世をも、我(が)後世をもとぶらはん」とあり、死後の菩提を弔う役割を果たすのは女院の役目であったことを明示している。

二位殿の言葉にあるように、一門が「罪」「苦患」を身に負い、死後も往生できずに苦患を強いられる運命にあったことは、予め決まっていたことのものである。それは、竜宮にいる一門から「一日三時ノ患」を受けていると夢告を受ける場面にも示される。

猿ニテモ過ニシ比、不思議ノ夢ヲ見タル事候キ。宗盛知盛ヲ始トシテ、受領檢非違使共ガ並居テ候ケル所ヲ、門戸ヲ固ク閉テ、『是ハ龍宮城ト申テ、此所ニ入ヌル者ハ二度帰ル事無シ』ト申シヲ、『苦患ハ無キカ』ト問侍シニ、新中納言立出テ、『一日三時ノ患アリ。助テタベ』ト申ト覚ヘテ、サメテ打オドカレ侍キ。

(第六末 廿五「法皇小原へ御幸成ル事」)

傍線部の「一日三時ノ患」は、『往生要集』の「畜生道」に「もろもろ龍の衆は、三熱の苦を受けて昼夜に休むことなし。」とあるのに対応し、二位殿が入水の際に女院に語った言葉が伏線となっていることがわかる。二位殿は入水後に竜宮での苦患を受けることを見越していたのである。女院がこの夢について「サレバ、海ニ入ヌル者ハ必ズ龍王ノ眷屬トナルト、心得テ候。」とし、二位殿の認識を同じように理解していたことは、法皇の前で入水場面を再現して語ったことから明らかである。

然ルニ先帝ハ神武八十代之正流ヲ受テ、十善万機ノ位ヲ踐ミ給ナガラ、齡未ダ幼少ニマシ〜シカバ、天下ヲ自ラ治ル事モナシ。何ノ罪ニ依テカ、忽二百皇鎮護ノ御誓ニ漏レ給ヌルニヤ。是即我等ガ一門、只官位俸禄身ニ余リ、国家ヲ煩スノミニアラズ、天子ヲ蔑如ニシ奉リ、神明仏陀ヲ滅シ、悪業所感之故也。

(第六末 廿五「法皇小原へ御幸成ル事」)

女院はなぜこのように滅亡に至ったのか、自らに問いかけ、自身が得た答えを語る。これは、入水直前、二位殿が伊勢神宮と正八幡宮に対して訴えた言葉とほぼ同じである。

吾君十善ノ戒行限り御坐セバ、我国ノ主ト生レサセ

給タレドモ、未ダ幼クオワシマセバ、善悪ノ政ヲ行給ワズ。何ノ御罪ニ依テカ百王鎮護ノ御誓ニ漏サセ給ベキ。今カ、ル御事ニ成ラセ給ヒヌル事、併ラ我等ガ累業一門、万人ヲ輕シメ朝家ヲ忽緒ニシ奉リ、雅意ニ任テ自ラ昇進ニ驕シ故也。

(第六本 十五「壇浦合戦事 付平家滅事」)

一見すると同様の記事の繰り返しに見えるが、これはただの言葉の再現ではない。入水して果てねばならぬ運命に至ったのは、ひとえに平氏一門の驕りと悪行のためであるが、二位殿は一門が「雅(我)意ニ任テ」昇進したことを「驕シ故」であるとしているのに対し、女院はただ驕りだけではなく、「神明仏陀ヲ滅シ」た罪についても触れている。これは、重衡による南都炎上のことを指している。女院は天子・国家(朝家)だけでなく神々に対しても罪を犯したからであると認識しているのである。

安徳帝の正統性の主張と、平氏一門の悪行による滅びという論理は、いわば『平家物語』が、その物語の始発から内包する安徳帝に対する基本的な視座と物語の論理であることは今さら言うまでもないが、法皇に訴えかける女院の言葉は、悪行を行った一門を代表しての「懺悔」であると同時に、一門を滅亡に追いやった加害者の法皇に対する「恨み」を含んでいるとも読み取れる。それは、

法皇が対面時に「カクトモツヤク知リ奉ラズシテ、今マデ見マヒラセザリケル事、何計リノ御恨ミヲカ残サセ給ヒツラムト、アサマシクコソ。」と自らの罪を無意識に自覚し、さぞや女院が「恨み」を持っているだろうと察した言葉からも明らかである。鎮魂のために苦しみを抱え続ける女院は一門の「恨み」の代弁者であり、その「恨み」の対象は法皇であったのである。

やがて、法皇還御の時刻が近づき、女院は「其二付テモ、今日ノ御幸コソ然ルベキ善知識ト、ウレシク候へ。」と述べて、一門に代わって懺悔を引き出した法皇を「善知識」と認識している。思いがけず法皇の御幸を受けて、父・清盛の悪行を自覚し、一門の滅罪鎮魂のために死後の孝養と自身の往生を願う女院は「カ、ル有待ノ身ノ危サハ、菩提ノサマタゲニ成ルト承レバ、辱ヲワスレテ申候也。」と語る。語り本系をはじめとする多くの諸本は、法皇がこの還御の後も何度か女院のもとを訪れたことになっていくが、延慶本では、法皇による御幸はこの一度しか書かれていない。そして法皇を善知識とみなしているのは延慶本のみ見られる表現であり、この「善知識」という存在は、以下に述べるように、建礼門院の女人往生を読み解くのに重要な手掛かりとなる。

法皇還御の後、女院は都が恋しく思われて寂光院での勤

行に集中できなくなり、法性寺に住まいを移す。

是ニ付テモ朝夕ノ御行法怠タラス、御年六十八ト申シ貞応二年ノ春晩ニ、紫雲空ニタナビキ、音楽雲ニ聞ヘテ、臨終正念ニシテ、往生ノ素懷ヲ遂サセ給ニケリ。御骨ヲバ東山鷲尾ト云所ニ納メ奉ケルトゾ聞ヘシ。今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覺テ、目出ゾ聞ヘシ。昔ノ如ク、后妃ノ位ニテ渡セ給ハマシカバ、女性ノ御身トシテ、争カハ彼法性ノ常樂ヲ証ジサセ給ベキト哀也。「源平ノ相論出来テ、災ニ合セマシケルハ、偏ニ往生極樂之靈瑞ニテ有ケル物ヲ」トゾ、人申合ケル。サレバ日来ハ自利々他之行業、廻向ノ功力、冥途ニ到テ、御一類モ共ニ苦ヲ離レ樂ミヲ得ル、疑ヒ有ラジ者哉。

(第六末 廿六「建礼門院法性寺ニテ終給事」)

女院は、後鳥羽院が承久の乱を起こして御子の院々宮々らとともに配流されたことを聞いて「何ナル罪ノ報ニテ、カ、ル憂世ニ生レ合ヒテ、ウキ事ヲノミ見聞ク覽。寂光院ニアラマシカバヨソ聞マシカ。指ガ是程目ノ当リハ見聞ザラマシ」と嘆くが、朝夕の勤行を怠らなかつた功が積もり、最後は「臨終正念」して往生を遂げたとされる。

女院の亡くなった年については諸説あり、語り本系諸本では建久二年(一一九二)説をとる一方で、読み本系諸

本では貞応二年(一一三三)頃、『歴代皇紀』『女院小伝』など史書類は建保一年(一一二一)説をとっている。また、亡くなった地に關しても、語り本系諸本では大原で往生したとするのに對し、延慶本では「法性寺」で亡くなり、墓所は「東山鷲尾」とされる。これは同じく貞応二年説をとり、大原から法勝寺へ、さらに東山の鷲尾へと居を移して死去したとされる四部本の記述と一致する。波線部に見られる「善知識ハ是莫大之因縁」とは、同文關係にある四部本の「善知識は是大因縁なり」が正しく、『法華經』「妙莊嚴王本事品」が典拠である。延慶本ではあえて「莫大之因縁」としているが、これは単なる書き間違いであろうか。先ほど女院自身が自覚したようにこの御幸のみが「善知識」であつたならば、女院の「今生ノ御恨」は法皇の御幸で消えたはずである。法皇の御幸を受けてもなお妄念が消えやらず、住居を法性寺に移したのに、承久の乱という「ウキ事」を伝え聞き、平家一門のことを思い出してしまった。ここでは、平家一門の滅亡、法皇の御幸に加えて、承久の乱という「ウキ事」を伝え聞く経験をしたからこそ、ますます往生への希求の念が積もつたのであるから、これらすべてが女院にとつては「莫大之因縁」であつたといえよう。

平家一門と安德帝を壇ノ浦に追いやり、新しく四宮を

後鳥羽帝として即位させた法皇に対する「恨み」の感情を持ち続けた女院は、先述したように、法皇が対面時に無意識に「恨み」を自覚したこと、さらに六道語りを強いて語らせた際に法皇が涙を流したこと、自ら、自身の妄念を自覚した。その深い妄念を消し去るために住居を変え、朝夕勤行を怠らないことで克服し、往生時には「恨み」が浄化されたのだと読み取ることができるのではないか。

おわりに

延慶本における女人往生の物語を読みといた時、物語全体を通して見えてきたのは、彼女たちが妄念を克服し往生へと導くために「善知識」の存在が不可欠であったことである。往生を遂げたとされる女性のうち、「善知識」の語を用いない小督と明記する建礼門院の物語を見つけたが、「善知識」の語を明記しない小督も、自らの身に起こった「憂きこと」を仏道に導く「善知識」と捉えた姿勢は建礼門院と同様である。この世での「恨み」を「一旦ノ恥」として往生への願いに昇華しようとした意識は、物語全体に行き渡る救済へとつながっているのである。

\*本文は、延慶本は古典研究会刊行の影印本に基づき、『延慶本平家物語 本文篇』（勉誠社、一九九〇年）と『校訂延慶本平家物語』（汲古書院、二〇〇〇年三月・二〇〇九年四月）を参照し、筆者が適宜送り仮名を施した。また、屋代本は『屋代本高野本対照 平家物語』（新典社、一九九三年）を使用した。

注

(1) 服部幸造「覚一本『平家物語』における女人往生」〔語  
り物文学叢説―聞く語り・読む語り―〕第四章 二〇〇  
三年、三弥井書店。初出は『国語国文学』二三号、一九  
八二年八月。

(2) 『曾我物語』仮名本系諸本では、大磯の虎の母の往生は  
記しておらず、真名本のみ表現である。

(3) 『善知識』（中村元監修『広説佛教語大辞典』二〇〇一年、  
東京書籍）。

(4) 今井ちとせ『宝物集』『善知識』の門をめぐって―「憂  
きことにあふも善知識」を中心に―（『宝物集研究』二  
号、一九九八年三月）。『宝物集』の本文は、吉川本は新  
日本古典文学大系を、片仮名三巻本は続群書類従をそれ  
ぞれ使用した。なお、片仮名本には濁点を付した。

(5) 夫の河津助通に先立たれた女房（曾我兄弟の母）は、こ

のとき三歳と五歳の二人の遺児を抱え、しかも懐妊して九ヶ月の身重でもあったとされる。以下、本文は東洋文庫を使用した。

折節懐妊して九月にぞなりける。返す返すも我が身を恨まれける折節、「かかる身と成て我が身心に任せず口惜しけれ。出家せむとは思へども身々とならむ時も憚りあり。また淵瀬に身をも投げて一道にとは思へども、かかる身と成て死する者は殊に罪深しと聞けば、左にも右にも抑角駄、げに女の身にばかり口惜しきものこそなかりけれ」と醒めても寝てもただ泣くより外の事ぞなき。

(卷二「三十五日・四十九日の仏事」)

(6) 勉誠社刊の底本頭注では、「底本には「讓」と「二」の間に若干の空白がある。長門本はその前後「ふしぎの事にて」とある。」とあるため、本稿での引用はそれに従った。

(7) 李鮮瑛『『平家物語』の女人造型と「恥」―祇王を中心に―』(『筑波大学平家部会論集』四号、一九九四年七月)、郭順伊『『平家物語』における小宰相―命を懸けた懇願―』(『国語国文学誌』三三三号、二〇〇三年一月)。

(8) 山添昌子『延慶本平家物語』における建礼門院像―物語の特質を求めて―』(『桐朋学園大学短期大学部紀要』

三号、一九八五年一月)。

(9) 生形貴重「『先帝入水』の可能性―延慶本『平家物語』『先帝入水』をめぐる―」(『軍記と語り物』二四号、一九八八年三月)。

〔付記〕

本稿は、二〇一一年七月三日に名古屋大学で行われた日本文学協会の第三二回研究発表大会での口頭発表を基に再構成し、執筆したものです。発表当日の質疑でご教示を賜った先生方、この場を借りて御礼申し上げます。

(よこやま・ちえ／名古屋大学大学院博士後期課程)